

# 学生会員の 声

## ●編集委員会学生委員を務めて●

本稿を執筆するにあたって、まだ修士1年であり化学工学の知識も、研究者としての経験も乏しい私に何が書けるだろうか考えた。しかし逆に、そんな駆け出しの研究者であり化学工学会員である私が1年間この学会誌編集委員会の一員として得た経験は、誰にも無いものだと思います、そのことについて振り返ることとした。

私は研究室の先輩でもある前任者から引き継いで、2020年度化学工学会誌編集委員会の学生委員を務めてきた。一昨年の年末に前任者から「学生委員の仕事をやってみないか」と話をもらい、引き受けたときは研究室の同期との分担の一環として仕方なく了承した側面が大きかった。正直な話、学会誌が毎月発行されていることは、研究室に置いてあるため知ってはいたが、学生委員の話をもらうまで中身を読んだことは一切なく、本稿が掲載される「学生会員の声」という連載が毎号掲載されていることも知らなかった。当初は、昨年度3月の編集委員会に前任者とともに出席させていただき、編集委員の先生方への顔見せをおこない、ある程度編集委員会の雰囲気や流れを掴んでから実際に1年間活動する予定であった。しかしながら、新型コロナウイルスの流行に伴い、昨年度3月の編集委員会には残念ながら出席できなくなってしまい、新年度に最初から一人で編集委員会に参加することになった。いきなり、修士1年の若造が、全国から集まった化学工学の専門家である見ず知らずの先生方に混ざって委員会に参加する事態にとっても緊張したことを今でも強く記憶している。

実際に私が学生委員として編集委員会でおこなう仕事は、主に2つで、月1回の分科会と全体会議に出席すること、そして他2人の学生委員と協力して「学生会員の声」に掲載する原稿を集めることである。

毎月の分科会と全体会議では、本誌に掲載される様々な特集の案について多くの提案がなされ、同時に深い議論が

交わされている。学会誌「化学工学」は1年間に12号発行され、そして1号の中には特集や連載、トピックス等を含ませて10件以上の記事が全国の先生方により執筆され掲載されている。これらの記事は分科会での最初の提案から何度も議論を重ねる中で修正され、全体会議を通じて承認され、実際に執筆、掲載される運びとなる。学会誌を読んだことのなかった私は、これだけ多様な分野、研究内容が1つの学会誌「化学工学」に掲載される記事として提案されていることにまず驚いた。それと同時に、化学工学とは非常に多くの分野を内包した学問であることを改めて実感し、私の知識の至らなさをまざまざと突きつけられた。また、編集委員の先生方が委員会で交わす議論は、特集の主旨や内容、執筆候補者といった記事の根幹に関する内容から、記事の掲載順や英題への翻訳といった編集面に関する内容まで多岐に亘った。それらの議論や指摘は、例えば記事の内容がご自身の専門外であったとしても、核心を突いた鋭いものばかりであった。1つ1つの案に対して妥協なく議論を重ねる様子には、圧倒されるものがあった。

一方で、現状、学会誌「化学工学」は、学生会員の本誌に対する関心が低いという問題を抱えている。1年間学生委員を務めた者として、学生会員の皆様には月に一度、冊子でも電子版でも構わないので本誌を開き、記事の一覧に目を通して欲しいと考えている。年間を通じて、非常に幅広い分野から特集が組まれているため、きっと興味に沿う記事が見つかると思う。また、本誌に対する関心のきっかけとしておすすめしたいのが、私たちが担当している連載「学生会員の声」である。本連載に寄稿する内容は執筆者に一任されており、それぞれの記事には、研究活動や学会での発表、インターンシップ等を通じて日頃感じたことをはじめ、化学工学との出会いについて、「自分が考える化学工学とは何か」といった内容が、執筆者自身の言葉で綴られている。これらを共有することで、自らの学びにできるほか、日々の活動における良い刺激になるのではないだろうか。

私が今年度1年間、学会誌編集委員会の学生委員を務めさせていただいたことは、非常に得難い経験であった。それは、単に会誌の編集を経験したということのみならず、毎月おこなわれる分科会や全体会議での様々な特集案についての議論を通じて、化学工学という学問の世界の広さを実感することができた点にあると思う。

最後になりますが、編集委員会でお世話になった先生方と学生委員の2人に深く感謝いたします。

(東京工業大学物質理工学院応用化学系 大歳夏生)